むかしのみずべは

この絵本は、福井県美浜町・若狭町の子どもたちが地域の人に聞いて描いた「昔の水辺の風景画」をもとに作成しています。

むかしのみずべは

ぱたぱた　ぱちゃっ
ぴちゃ　ぴちゃ
ちょろ　ちょろ　ちょろ
さらさら　さらら

おじいちゃんやおばあちゃんの
子どもの頃はな

この辺りの川は

自然がようけ　そのまんま

流れに身をまかせて　水草が　ゆらゆらゆら

川の底には　石が　ごろごろごろろ

石の下は　生きもんらの　絶好の隠れ場所

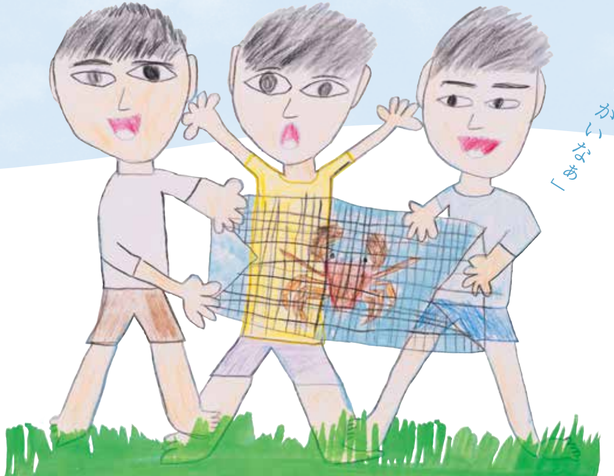
いろんなもんが　ところせましと

うじゃうじゃ　ざわめいて　とても賑やか

水面が　ピカピカ　　魚は　キラキラキラ

ヤマメも　フナも　ナマズも　みんな
水が流れる音と一緒に　光っとる　光っとる

川は子どもらの遊び場で



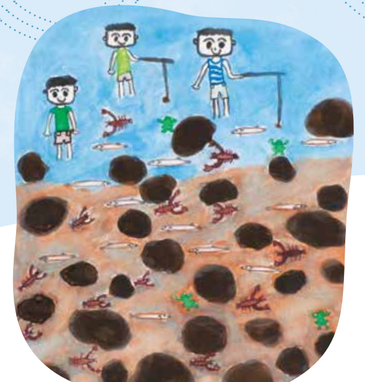
魚やカニをよう捕りに行った

足に魚が吸いついてきたこともあった

みんな　川の中に　じゃぶじゃぶ入って行くんや

「おいで」
「おいで」
「おった」
「捕まえたで」
「でっかいわ」
「逃がさへんで」
「貝もようけ採れるわ」
ヌルルル　ヌルッ
ガサガサ

毎日捕っても　どんだけ捕っても
魚もカニもエビもシジミも　まだまだ捕れる
いったい　どこに隠れとるんや



空き缶の仕掛け　竹竿釣りの餌はミミズ
ウナギ釣りの時は　大きい針にドジョウをつける

草のしげみ
ヨシの根っこの小さい穴
隠れとる場所　知っとるで

自分らで作った道具で　いろんなもん　ようけ捕まえたなぁ

セミ　カブトムシ　クワガタ　トンボにちょうちょ
虫も　今よりもっとようけ　おったしなぁ

友だちとも　よう虫採りしてな
水辺におったら　ずっとわくわくしとるんや

夏の晩も

そこらじゅう

ホタルでいっぱいや

ゆらゆら
ピカピカ

ふわふわ
チカチカ

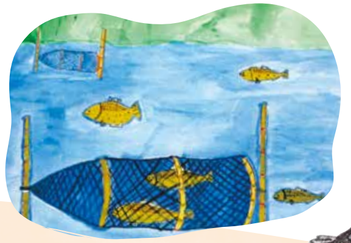
いっぱいの自然に　恵まれとったんやなぁ

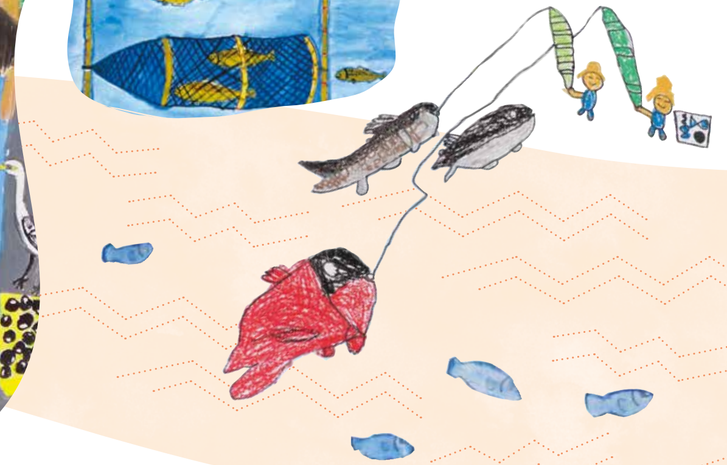
川は身近にようけあって

細い川にも　生きものが　ようけおって
広い川には　舟が通っとるとこもあった

おばあちゃんが　腰をかがめて　洗濯しとったり
夏は　スイカやヤカンのお茶を　よう冷やしとった
シミーズで泳いどる人もおったわ

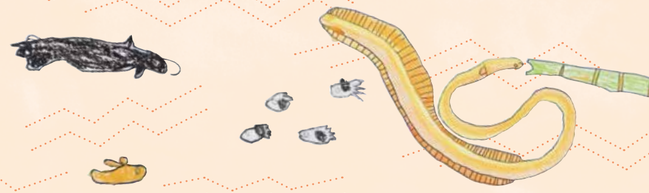
捕った魚は　おかずにして食べるんや
シラウオは大きい網で　フナはもんどりで捕るんや





ウナギは蒲焼き　タニシはたいて
ウグイやモロコは
焼いてからたいたり　天ぷらにもした

ヒシは　塩茹でにして食べたら
栗みたいな味やった



暮らしにとって　川は大事な場所やったわ

田(た)んぼも四季(しき)折々(おりおり)で衣替(ころもが)え
いろんないのちが輝(かがや)いとってな

牛(うし)で田(た)んぼを耕(たがや)して
苗(なえ)を植(う)えるために
枠回(わくまわ)しを転(ころ)がしながら　印(しるし)をつけていく
苗(なえ)はひとつまみずつ　丁寧(ていねい)に植(う)えとったんやで

田んぼには “魚の道” ていうのがあってな
雨がよう降ったあとに　フナやらコイやら
いろんな生きもんが　田んぼに上がってくるんや

川にも　サケが上がっとったらしいわ

ヤゴ　アメンボ　カエルにメダカ
ゴリン　ドジョウにモロコ　ドスマン
田んぼの “ふち” は　生きもんのすみかやった

稲刈りも　みんなでしたなぁ
田下駄を履いて　刈るんや
刈った稲は　田舟で運んで
稲木に掛けていく

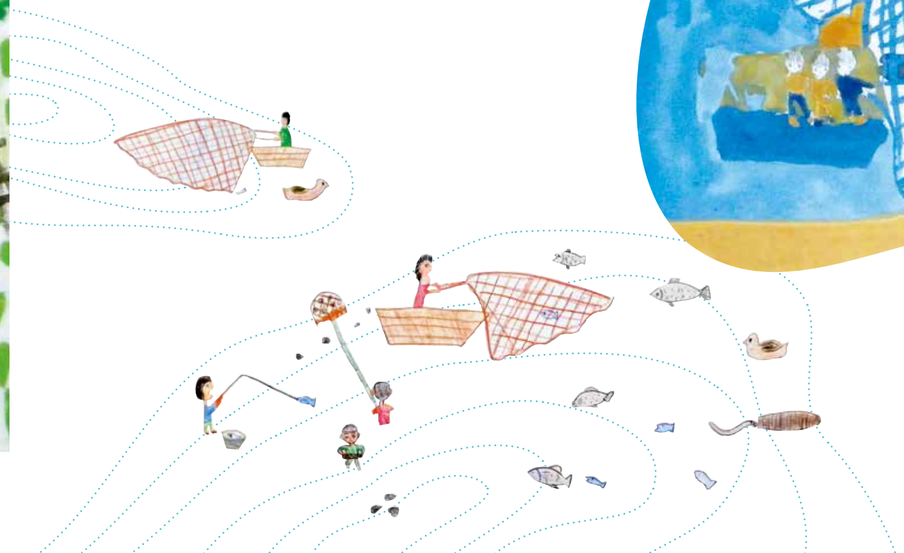
それが全部終わるころには　イナゴもようけ飛んどってな
田んぼのまわりにも　柿や栗がようけなっとった

川や田んぼの豊かさは
湖とともに育んできたんや

湖　川　田んぼ
水はぜんぶ　つながっとる

湖には　渡り鳥がよう来とった
かやぶきの家を　“くずや”ていうてな
倉の壁は　土でできとるさけ
夏は涼しいし　冬でも寒なかった

漁にも出とったで
男の人が　舟を漕いで
女の人は　舟小屋から音を出して　帰る場所を知らせとったわ



湖でやっとった地引網は
日本で一番大きいて言われとったんやで
フナ　コイ　ボラ　セイゴやらが
船いっぱい捕れたんや

ウナギ　ハス　モロコ　オイカワ　ウグイ
湖にも　魚がようけおったわ

懐中電灯を照らして
テナガエビを　捕ったりもしたなぁ

冬には湖面に氷が張ってな　ワカサギ釣りが　人気やったそうや

たたき網漁も　冬の風物詩
長い竹竿で　湖面を勢いよく叩く
コイやフナがびっくりして
湖底から出てくるんや

ばしゃっ　ばしゃっ

びしゃっ　びしゃっ

湖畔に　舟小屋があってな

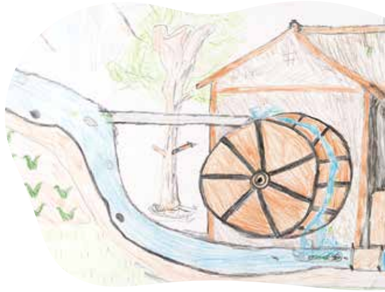
山すそには　梅林が今よりもっと広がっとったんや

舟は　漁に出るだけやなくて

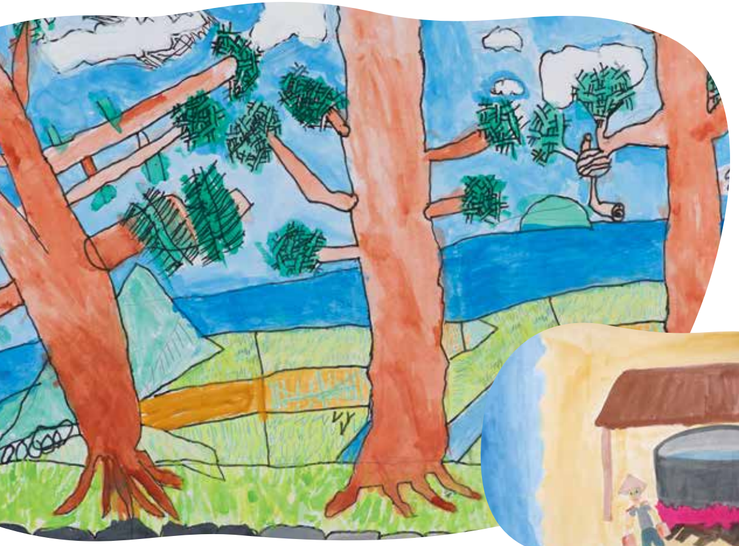
採れた梅や農作物を　街まで運ぶ　大事な移動手段やった

風景の中にも物語があるんやわ

お地蔵さんの周りで
ようけ子どもが遊んどった



水車も牛も　暮らしの一部や

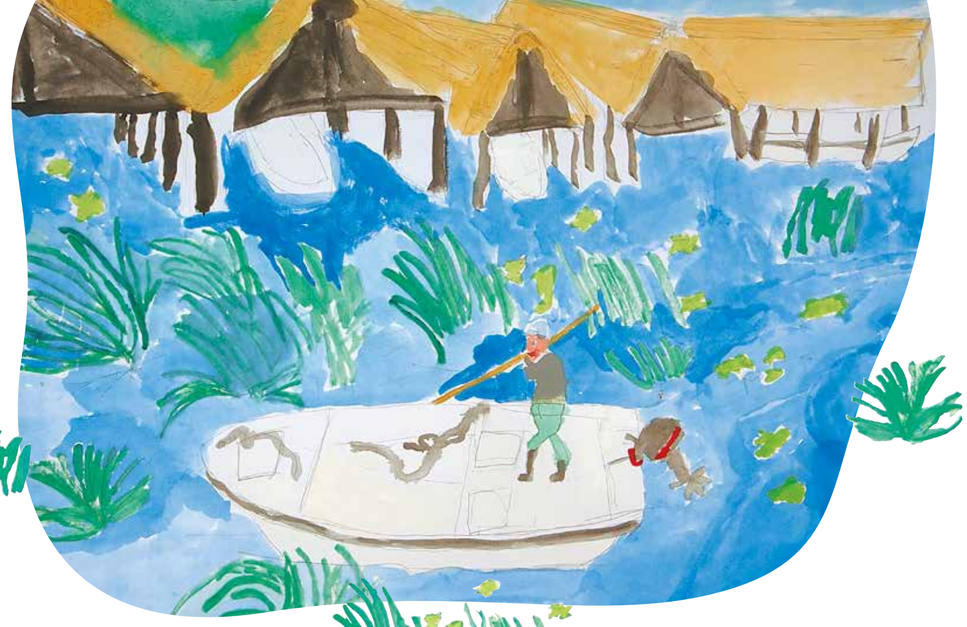


海のそばの松林のとこな
昔は塩田やったらしいわ

殿様に献上するための
美味しい塩を作っとったみたいやで

砂浜に小屋を建てて　大きい釜に海水を入れてな　二晩くらい火にかけたら　真っ白な塩ができるんやて

4年生まで通とった　分校の小学校
SLが走って行く　音とにおい
今はもうないけど　田んぼに向かう舟からの景色も　好きやった



池の蓮も　見事やったなぁ　　そりゃあ　きれいに咲いとったで

昔のこと話しとったら

いろいろ思い出してくるもんやなぁ

水辺のはなし　今日はここまで

「昔の水辺の風景画」活動への思い

大下　恭弘
ハスプロジェクト推進協議会　会長
三方五湖自然再生協議会　環境教育部会　部会長

「そうだ！　子どもたちに絵をかいてもらったらいいんじゃない？（ちょっと大変そうだけど）」。

2006年の年末に開いたハスプロの寄り合いの時でした。当時、地域の年配の方が持っている「水辺の生活の記憶」をどうやって未来に残していくか、思案していました。田んぼでフナ捕り、湖でシジミ捕り、川遊び、ウナギ釣り、小さな田んぼが連なる風景…。年配の方の記憶に残る水辺とともに暮らす風景は、今はすっかり変わってしまっています。そして、薄らいでいく記憶とともに、“水辺への想い”も失われようとしていると感じていました。私たちが願っていた三方五湖地域の自然再生は、物理的な再生が進むだけでなく、地域住民が地域を誇りに思うことこそが大切と思っていました。私たちハスプロメンバーでお年寄りからの聞き取りをしていたのですが、これでは一部の人の記録にしか残りません。

そこで、現在の子どもたちが自宅や近所のお年寄りに昔の水辺の風景を聞き取り、それを絵に描いてもらう方法を考えついたのでした。毎年夏休みにお願いしてご提出いただいた絵画には、想像以上に豊かな風景がよみがえっていました。そして、その絵を介して、お年寄りと子どもたちに深い対話があったことも伝わってきました。地域の方々の優しい語らいや教えのもと絵を描くことで、「地域の豊かさと誇り」が今の子どもたちにも伝わったのではないかと思っています。

このたび、子どもたちが描いた絵画を絵本にしてくださったことで、絵画がふたたび私たちに昔の水辺の風景を語り始めたような気がします。この絵本を通じて、三方五湖地域の豊かな自然とともに暮らす誇りある風景が、未来につながることを祈念しています。

絵画を描いてくださった子どもたち（もう大人になっている方も）、お年寄りの方、学校の先生方、地域の方々、一緒に取り組んでくださった研究者の皆さま、そして絵本にしてくださった皆さまに、感謝申し上げます。

ありがとうございました。

「昔の水辺の風景画」は、地域の子どもたちを対象に夏休み前に募集し、夏休み明けにたくさんの作品が集まりました。写真は、若狭町内の小学校でのワークショップ風景です。

「昔の水辺の風景画」募集のあゆみとこれから

富田 涼都
静岡大学農学部 准教授

樋口 潤一
福井県里山里海湖研究所 研究員

「昔の水辺の風景画」募集は、2007年にハスプロジェクト推進協議会の活動として始まり、2009年から三方五湖の総合研究プロジェクトのメンバーも加わって風景画だけでなく、その内容のエピソードを書く形になりました。2013年からは自然再生の一環として行われています。これまでに延べ1700程度の風景画が集まり、そこには魚捕りをしたり、遊びまわる当時の子どもの姿も生き生きと描かれていて、人と湖や川とのつながりを教えてくれます。その内容は、展覧会や「五湖のめぐみフォーラム」、各地域でのワークショップ、ウェブサイトの「みんなの三方五湖マップ」などで紹介・公開してきました。

2021年からは「話そう 描こう 水辺のくらし」とタイトルを変えました。その理由は、風景だけでなく捕った魚の料理や、お祭り、行事、水害なども描く対象にしてほしかったためです。実際、お祭りの様子を描いた絵があり、話し手の感想には「祭りに興味を持ってくれてとてもうれしかった」と書かれていました。話を聞いて絵を描く作業は、世代を超えたコミュニケーションでもあります。まだまだたくさん伝えたいことが眠っているはずです。語り手の大人には懐かしい、聞き手の子どもには見知らぬ「水辺のくらし」の記憶が世代を超えて伝えられ、未来の水辺をつくる足がかりとなることを願っています。

絵本制作に寄せて

吉田　丈人
総合地球環境学研究所・東京大学大学院総合文化研究科　准教授

たくさんの子どもたちがたくさんの大人たちから聞いて描いた「昔の水辺の風景画」が集まって、一冊の絵本になりました。子どもたちと大人たちが心を通わせた暖かくて大切な時間が、たくさんつまった絵本です。素敵な絵本ができたことをとてもうれしく思います。制作に関わってくださった多くの皆さまに深く感謝します。

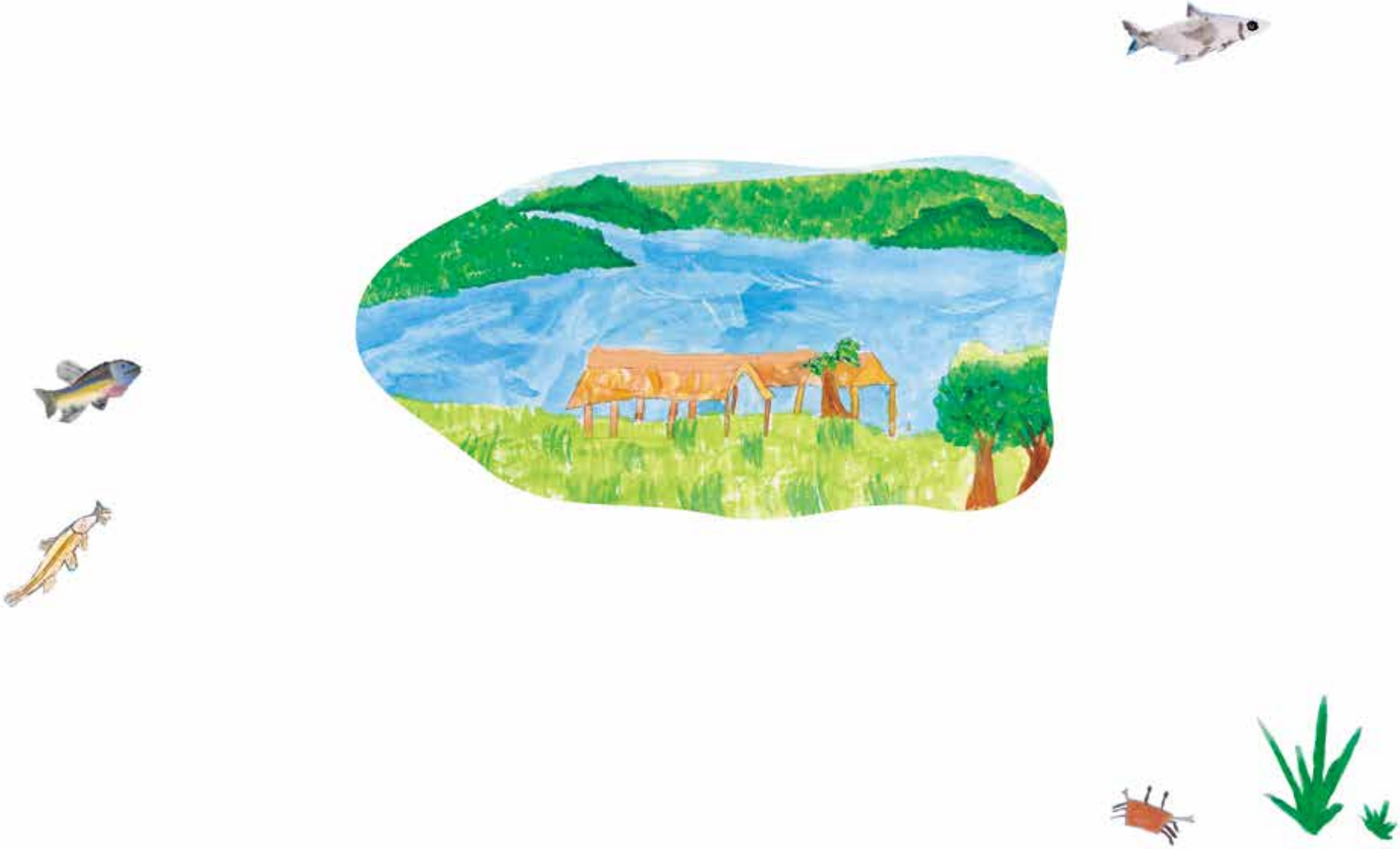
三方五湖地域で進む自然再生は、地域の自然を守り育むだけでなく、その自然を基にしている地域社会のにぎわいや受け継がれてきた地域の文化を、次の世代につなげていく取組みです。子どもたちが、この絵本をきっかけにして、自然をより身近に感じ、実際の自然に触れ合ってたくさん楽しんでもらえたらと思います。そのために、大人たちは、自分たちが子どもの頃に楽しんだ自然を取り戻し、次の世代に引き継いでいく努力を続けていくでしょう。この絵本には、生き生きとした昔の水辺と人々があざやかに描かれていますが、自然再生が目指す未来の姿を映しているようにも見えます。

むかしのみずべは

発　行　　2022年3月
発行者　　総合地球環境学研究所Eco-DRRプロジェクト
「人口減少時代における気候変動適応としての生態系を活用した
防災減災（Eco-DRR）の評価と社会実装（代表：吉田 丈人）」

プロデュース　奥井かおり
監修・編集デザイン　梅田美代子
デザイン　にしもとひろこ

協　力　　関岡 裕明
坂口 奈美
谷保 裕子
ハスプロジェクト推進協議会
三方五湖自然再生協議会 環境教育部会
座光寺ちなつ

ISBN　978-4-906888-89-4

これまでに寄せられた数多くの「昔の水辺の風景画」作品は、
インターネットの「みんなの三方五湖マップ（www.mikatagoko.jp）」でも見ることができます。